

二〇二六年一月一七日

キラキラのビニールハウス冬の晴
寒稽古息乱るるも礼で終へ
阪神忌海は真青に凪てをり

二〇二六年一月一六日

初夢の話に尾ひれ美容室
犬友のおしやべり尽きず日脚伸ぶ
献湯の有馬の湯女や初戎
着膨れて朝の体操転びさう
ほぐれそむ尾上の松に侍る梅

二〇二六年一月一五日

カクテルに灯を写しけり女正月
刃物売る鋭目は訥弁初戎
鏡割着物姿の異邦人
国宝の太刀の刃冴ゆる展示室
竹爆ぜて一喝されしとんどかな
亀首を天へ伸ばして日向ぼこ
雪吊を掠めて鳥語蒼天へ

二〇二六年一月一四日

蒼天へ幟幟めく初恵比寿
ジョギングの足を緩めて御慶かな
金ピカの露店居並ぶ初戎
大福箕これ以上なきゑびす顔
甲羅干す池塘の亀に冬日燦
玉の日を纏ふ古木の淑気かな

こすもす

かかし

うつぎ

あひる

きよえ

うつぎ

たか子

きよえ

うつぎ

せいじ

かかし

わたる

みきえ

澄子

むべ

あひる

よし女

せいじ

うつぎ

むべ

澄子

二〇二六年一月一三日

並木なしほうき立ちせる枯木かな
風邪の妻厨の吾を覗き見す
福笹をかざし電動車椅子
岨道の団栗畳な滑りそ

二〇二六年一月一二日

天守へと吹雪高舞ふ寒九かな
冬日燦関守石の著るき影
遺構とす震禍の埠頭水温む
人波の我も一人や宵戎

二〇二六年一月二一日

弾初は孫と連弾肩寄せて
書初の墨の匂ひに背を正す
新春の埠頭に凜と日本丸

ぼんこ

かかし

やよい

澄子

明日香

澄子

あひる

うつぎ

もとこ

愛正

せいじ

毎日句会みのる選・二〇二六年一月一九日